

神奈川県における古墳時代の開始

遠 藤 秀 樹

はじめに

神奈川県の古墳についての論文は、その古墳数自体の少なさからか、南関東として一括に論じられることが多い。例えば『古代学研究』123号の「円墳特集」では「東京湾周辺」として扱われ、「最後の前方後円墳特集」では神奈川県は洩れてしまっている。ところが、平塚市真土大塚山古墳や川崎市幸区加瀬白山古墳は関東地方でも出土例が少ない三角縁神獣鏡を出土し、全国的にも重要な位置にある。

そして、『前方後円墳集成』（近藤編1992・93・94）において前方後円（方）墳の存在するすべての県ごとに前方後円（方）墳がカード化され、やっと神奈川県の情報も全国の研究者に伝わったのである。そのなかで神奈川県の古墳の出現について新しい知見を得たので改めて稿を起こした次第である。

ここでは、関東地方の他地域の様相に触れながら、南関東から独立して、神奈川県の古墳の出現について私見を述べてみたい。

1. いわゆる古墳出現期について

弥生時代から古墳時代への墳墓の定義を明らかにしたのは近藤義郎である。近藤は前方後円墳の成立をもって古墳時代と考え、それ以前の墳墓を弥生墳丘墓という名称を用いた（近藤 1983）。具体的には、前方後円墳の特徴として、

- (1) 鏡の多量副葬志向
- (2) 長大な割竹形木棺
- (3) 墳丘の前方後円形

という定型化とその巨大性を挙げた。これらの代表的な古墳は、奈良県箸墓古墳・京都府椿井大塚山古墳・岡山県浦間茶臼山古墳・兵庫県吉島古墳で、これらにその後調査された兵庫県権現山51号墳が加えられた。

都出比呂志は近藤論を補強し、「前方後円墳体制」を概念化した。そして前方部の成立を理解する考え方として中国思想の影響を加える。それは第一に埋葬における北枕の思想、第二に墳丘の三段築成、第三に朱の愛好である（都出 1989）。

一方、これらの考え方より古墳の出現を早く考える人々がいる。

まず石野博信は、近藤のいう墳丘墓の段階（庄内期とそれ以前）に前方後円墳・割竹形木棺・鏡等の副葬品を認め、古墳 = 古墳時代としている（石野 1981）。この考えは近年も繰り返し述べられており、近藤のいう前方後円墳への飛躍⁽¹⁾ 3点を疑問視している（石野 1992）。

次に、杉山晋作は、千葉県の神門「古墳」群の例を挙げながら、木棺・副葬品構成・供獻土器組成に古墳との断絶を認めず、古墳の範疇に含めて考えている。⁽²⁾

近藤・都出と石野・杉山は前二者が歴史的な画期を前方後円墳の出現の段階 = 「首長靈繼承祭祀の場の形式化と莊嚴化」として評価するのに対し、後二者は墳丘形態・埋葬施設・副葬品などの要素をとっても首長權繼承の創設であり、その場が古墳であると定義しているのである。

また、関東地方の出現期の認識については大村直、田中新史の考え方がある。

田中は、方形周溝墓から前方後方型周溝墓への変遷過程を設定し、古墳時代を出現期・前期・中期・後期・終末期に分け、「出現期」はガラス玉等の副葬品をもつ埋葬者が一斉に目立ち、墓には規模差が生まれ、方形周溝墓の周溝は辺の中央に通路を設けて、その正面に特定被葬者を埋葬する墳形（B 1 亜式）⁽³⁾ が出現し、玉類や短剣の副葬が目立ってくると位置づけている。そしてこの時期の新段階には、千葉県市原市神門の円形墓が含まれるという。土器編年上の上限は庄内式期以前、畿内第五様式亜式および酒津式期併行で、新段階は元屋敷期および月影期新段階で、畿内との対応は庄内古段階直前に比定している（田中 1984）。

一方大村は、定型化した前方後円墳の出現をもって古墳の成立としている。そのため、古墳以前の墳墓は墳丘墓と呼び、土器編年上前期古墳の上限を布留式・五領式併行期に固定し、さらに前期古墳を土器編年との対比によって出現期として二分している。出現期1期は五領1式期に対応し、出現期2期は五領2式期に対応させている（大村 1982）。

この論点の相違については、利根川章彦が述べている（利根川 1991）ように「大村氏と田中氏のそれぞれの考え方が現状の通説的位置を占める近藤・都出学説と石野博信氏らの古墳発生論の見解の対立をそのまま東日本において再現しており、いわば代理戦争のような形になっていることがわかる」と指摘している。

また、土器の編年に依拠して弥生時代と古墳時代を画する考えがある。これは、住居址出土の土器編年から新しい土器群の出現をもって古式土師器のはじまり、つまり古墳時代とするものである。

以上のような論争を踏まえてか、日本考古学協会では、出現期古墳について1981年と1993年の2回、東日本の当該期の土器編年に重点を置き、議論している。

1993年の新潟大会では、事務局案として畿内第五様式から布留式期の土器を8期に分類し、東北、東海、北陸、関東地方の前方後方型周溝墓、大型墳、埴輪等の編年を立てている。

本稿で取り扱う神奈川県に関しては、西川修一が相模と多摩丘陵出土土器を3期に編年し、それぞれ二分する編年案を立てている。これは、1981年の同字都宮大会の滝沢亮による編年、1992年に東海大学で行われたシンポジウム『西相模の3・4世紀』の比田井克仁の編年などを踏まえたもので、併行関係に多少のずれはあるものの大筋的には違いはない。

本稿では、畿内第五様式から布留段階の土器編年は西川編年を、古墳の編年は『前方後円墳集成』編年（近藤編 1990）を採用することにしたい（第1表）。

第1表 各地の土器編年と前方後円墳編年の併行関係

新潟シンボ	西川(相模)	『前方後円墳集成』編年	赤塚(東海)	寺沢(大和)
1				
2	I			
3			廻間 I	
4				
5	II			庄内
6				
7		1期		
8	III	2期	廻間 II	布留 0
9		3期	廻間 III	布留 1
10		4期	松河戸	布留 2
				布留 3

2. 関東地方の土器と墓制

南関東地方における弥生時代の墓制は方形周溝墓が広く知られているが、方形周溝墓は弥生時代中期の宮ノ台式土器の段階に横浜市歳勝土遺跡にみられるように定着し、完熟度の高い共同体社会がみられる。

地域的にみると、方形周溝墓が認められない東関東東部や礫床墓を採用する赤城山麓、方形周溝墓が一旦姿を消し、また復活する千葉県北部など地域により様々な様相を呈すといった状況である。しかし一部の地域では、方形周溝墓の周溝の辺の一部を掘り残した形

態（田中の言うB亜式）のそれが出現し、これを発展させたと思われる前方後方型周溝墓に発展する。これに対応するかのように何度も引用されている、千葉県市原市国分寺台の神門5・4・3号墓と続く弥生時代中期以降の在地の方形周溝墓とは別に、弥生時代終末期に円丘の外来的要素の強い墳丘墓が出現する。これは在來の自立的発展を通じ、自己完結的に出現したとは考えられない。

さらに古墳の発展段階を地域的にみると、千葉県の東京湾岸では神門・小田部のように円形、東間部多・飯合作などの例のように庄内末から布留古段階の前方後方型墳丘墓の段階を経て能満寺古墳・手古塚古墳などの前方後円墳の出現をみる。

群馬県地域は弥生時代後期の周溝墓は樽式土器段階、例えば高崎市日高遺跡に認められる。この中には円型を呈す周溝墓も含まれる。しかし、古墳時代（石田川式土器を伴う）の周溝墓は広く定着し、そのありかたは梅沢重昭・橋本博文が8種に分類している（梅沢・橋本 1988）。また、この地域の樽式土器の分布圏では初期古墳が円墳（例えば烏川、井野川、鏑川水系）、石田川式土器受容地域では大田頬母子古墳・軍配山古墳の他は、前方後方墳の前橋八幡山、前方後円墳の天神山古墳、円墳の朝倉2号墳などがみられる。そして、大型古墳の出現とともに前方後方型周溝墓も生まれてくる。これらは表裏の関係で進められている（右島 1990）とみる。

埼玉県域の荒川東岸では弥生時代中期後半以降に方形周溝墓が分布し、その後は熊野神社古墳・上尾殿山古墳のように円墳にかわる地域である。荒川西岸では弥生時代の早い段階から方形周溝墓が認められ、方形周溝墓と並存して吉見町山の根古墳（前方後方墳・66m）が出現する。小山川・志戸川流域では五領期古段階に塚本山33号墓・岡部町石蒔B遺跡・美里町南志渡川遺跡など前方後方型周溝墓が認められる。これは荒川東岸、群馬県の樽式土器分布圏とも共通する様相である。利根川南岸では初期古墳は確認されておらず、行田市高畑1号方形周溝墓が五領期新段階で存在し、吉ヶ谷式土器分布圏では方形周溝墓が広範に分布し、そのなかに前方後方型周溝墓が出現するが、その後続はたどれない。

栃木県域の弥生時代後期の二軒屋式土器段階では方形周溝墓は確認できておらず、群馬県域と同様、弥生時代後期の土器とは系譜を異にする土器群によって古墳の出現をみる。しかし、近年外来土器と在来土器を伴出する前方部がバチ型を呈す全長50mの前方後方墳の河内郡三王山南塚2号墳が確認されたことにより、古墳の出現が改めて遡ることになった。しかし、栃木県域の出現期古墳は足利市小曾根浅間山古墳を除いて前方後方墳であることの変更はない。

茨城県では壺棺墓の段階が弥生時代を通じて存在し、外来土器の流入をも拒否し、古墳出現期に古墳と方形周溝墓が同時に許容された地域である。

神奈川県の東京湾岸の弥生時代後期は、朝光寺原式土器に代表されるように小地域文化圏があり、しかも他地域との関連性があること、また東海地方の影響をうけた土器が出土

することは岡本勇によって述べられている。それは、弥生時代中期、宮の台式土器段階は土器の斉一性が強いが、次の時期は関東地方の他地域と同様、小さな地域ごとに個性豊かな土器群がそれぞれ一定の文化圏を作っていることが明らかになったことである。そのあらましは、東京湾岸から武藏野台地、千葉県の東京湾北岸は櫛描文をもたず細縄文を特徴とする久ヶ原式土器・弥生町式土器が分布する。横浜・川崎の丘陵地帯には、北関東の櫛描文様の系譜につながる文様をもつ朝光寺原式土器が、相模湾岸には伊豆・駿河の櫛描文の流れをくむ土器が出土し、後期後半は地域色、遺跡毎の違いが顕著にみられる（岡本1978）。

ところが後期後葉になると土器の地域間交流が活発化した。相模では高坏の数が増加し、相模湾左岸の土器は櫛描文を主体とするが（本郷遺跡・篠山遺跡・神崎遺跡）、右岸は縄文を主体とする（根丸島遺跡・王子ノ台遺跡）土器が主体となって東海地方西部の影響を左岸がストレートに受けるようになる。⁽⁴⁾ 東京湾岸では、相模からの影響を受け、東海系の土器が参入する。三浦半島では、対岸の千葉県の影響を受け輪積痕の残る甕が出土する。

次の段階は、前代にはなかった小型器台・有段高坏・パレス壺・ひさご壺・S字甕が東海地方から波及、定着する。さらに前段階に波及した器種に加えて小型丸底坩が加わり、相模型の装飾壺がなくなるのがこの段階である。この時期は関東地方一円に斉一的な土器がみられもある。

墓制では弥生時代中期前半の須和田期に展開した再葬墓に代わり、方形周溝墓が造営されるのは中期後半の宮の台期である。この時期の方形周溝墓が集中するのは鶴見川流域で、例えば横浜市歳勝土遺跡は大規模な完成された環濠集落であるが、それに近接した大塚遺跡は25基以上の大方形周溝墓群の遺跡である。また、宮の台期の環濠集落と方形周溝墓群との組み合せの関係にある遺跡として、同じ鶴見川流域の矢崎山遺跡・権田原遺跡・能見堂遺跡などがある。この時期の方形周溝墓の形態は周溝の四隅がとぎれる点が特徴である。また、方形周溝墓の規模をみると、宮の台期の方形周溝墓は一辺の平均が10m程度のものが多く、大きな格差は認められない。しかし、横浜市折本西原遺跡では一辺20mを超すものが出現する（1号方形周溝墓 25m・3号方形周溝墓 23m）。

弥生時代後期になると、方形周溝墓に規模の格差が顕著にみられるようになる。例えば秦野市王子ノ台遺跡の方形周溝墓は大・中・小の三種の規模に分類でき、集団内での変質を想定できる。このことは、5号方形周溝墓から鉄剣が出土したり、7号方形周溝墓からガラス小玉が出土したり、副葬品や装着品がみられることからも裏づけられる。形態は王子ノ台遺跡の場合、周溝が全周するものが多い。さらに周溝の一部が深く掘り窪められているものもあり、周溝内埋葬が考えられる。

次の段階にも方形周溝墓は引き続き県内各地に築造されるが、多摩川や鶴見川水系の方形周溝墓は数が減るのに対し、相模川や花水川水系のそれは増加傾向にある。また、赤塚

の言うB型墳丘墓や円丘墓、畿内前期古墳に類する副葬品を持つ古墳や前方後方墳が出現する。それらに関しては次章で紹介してみたい。

3. 神奈川県の墳墓の様相

関東地方の弥生時代後期以降の墳墓の形態は方形周溝墓が主流だが、汎日本的にそれの中でも周溝の一部を通路として掘り残したものや円丘のものが出現するようになる。これらはマウンドや埋葬主体部が確認されていないものもあるが、それらと明らかにマウンドをもつものについて取り上げてみたい。

1. 円丘墓

ア. 平塚市御所ヶ谷遺跡（大川他 1988）

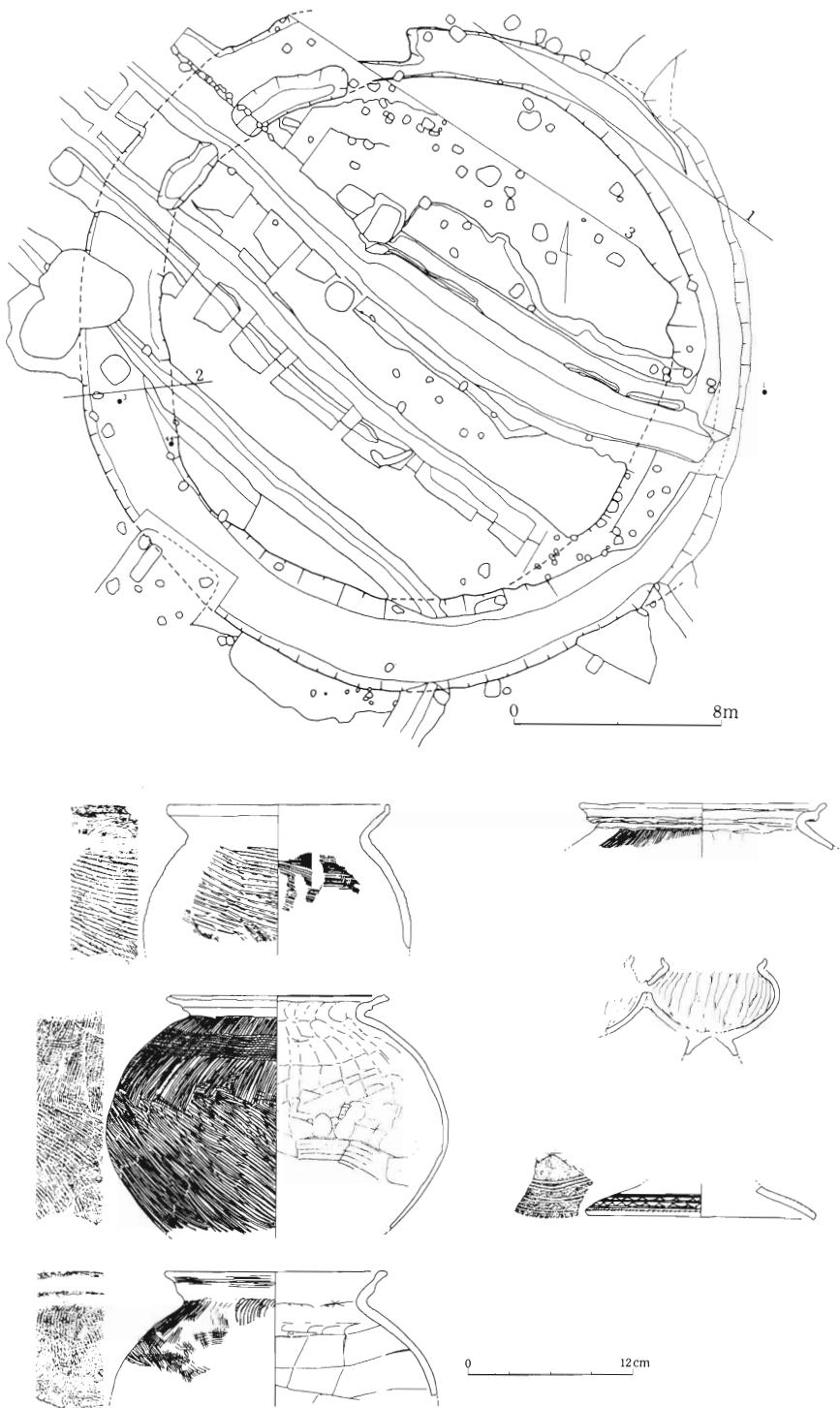
- 円形周溝墓と報告されている円丘墓は径26mを呈し、北側に通路を設けている。マウンド、主体部は削平されてか確認されていない。周溝内からは甕40、壺34、高壙5と多量の土器が出土している。特筆できるのは尾張・三河に分布をもつ元屋敷式土器と考えられる小型高壙とS字状口縁をもつ三連台付甕、これは静岡県富士宮市野中向原遺跡に出土例がある。加えて、畿内の庄内式土器に出自を求められる叩き目をもつ甕も出土している。
- 御所塚と呼称されており、円形周溝墓の周溝を切って築造されている。規模は、周溝の内径30m、外径50m、周溝幅6.5～8.5mでかなり大型である。マウンドも存在したようである。

イ. 伊勢原市小金塚古墳（久保編 1985）

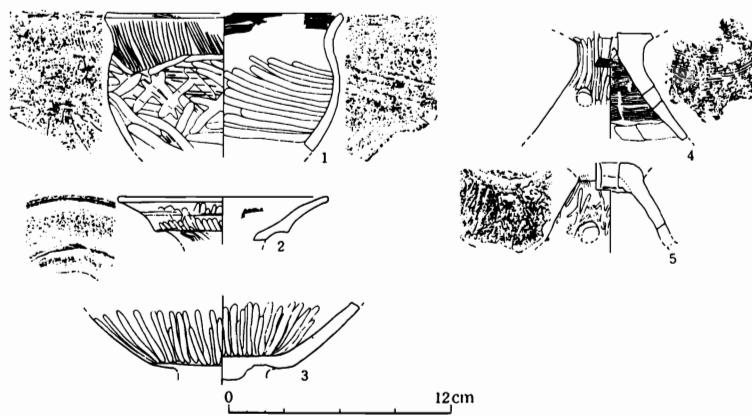
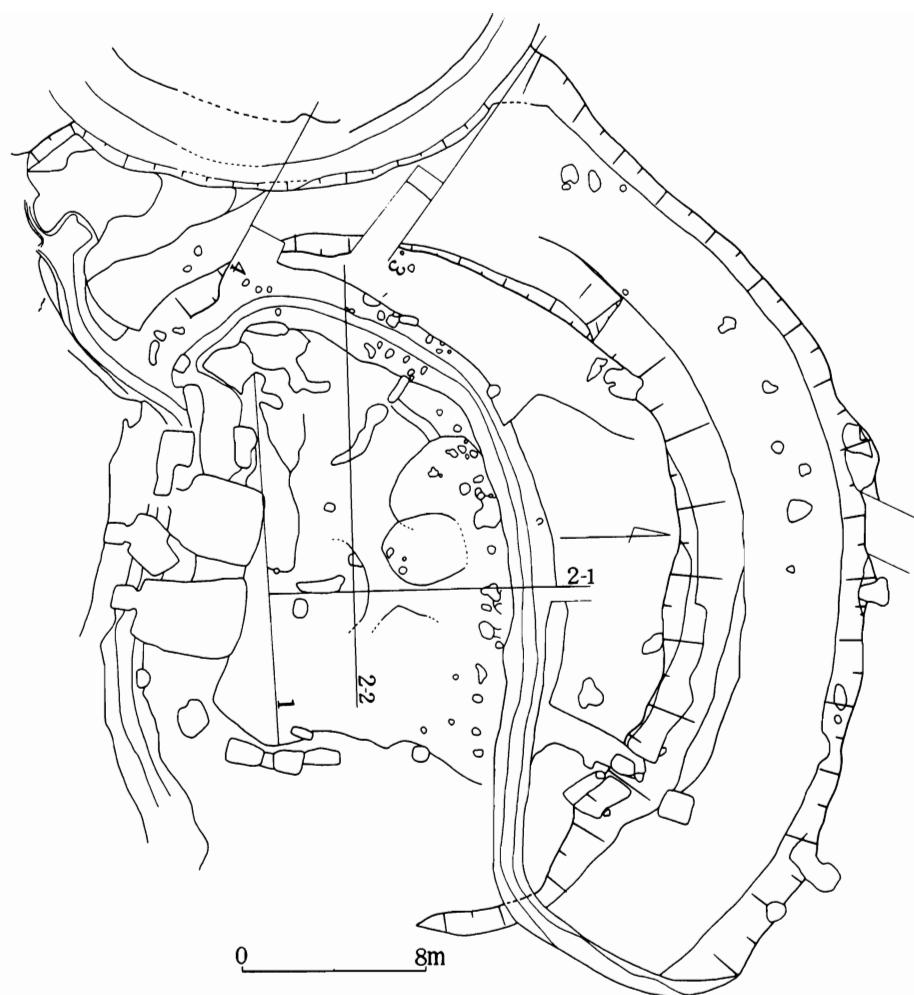
測量調査と周溝確認調査が行われ、径46m、高さ6mの大型円墳であることが判明した。周溝は幅10mで、周溝底から朝顔形埴輪が2個体出土している。そのうちの一体の特徴は、円筒部に比べ、肩部が張りをもち、外面調整はタテハケ・A種横ハケである。透かし穴の形態は三角形、逆三角形、半円形であり、タガ状突堤の断面は、上辺が内彎して稜が鋭角的で突出度が高いものと、台形に近い正方形のものがある。埴輪編年Ⅱ期（川西 1978）に比定できる。

ウ. 川崎市久地伊屋之免古墳（持田・村田 1987）

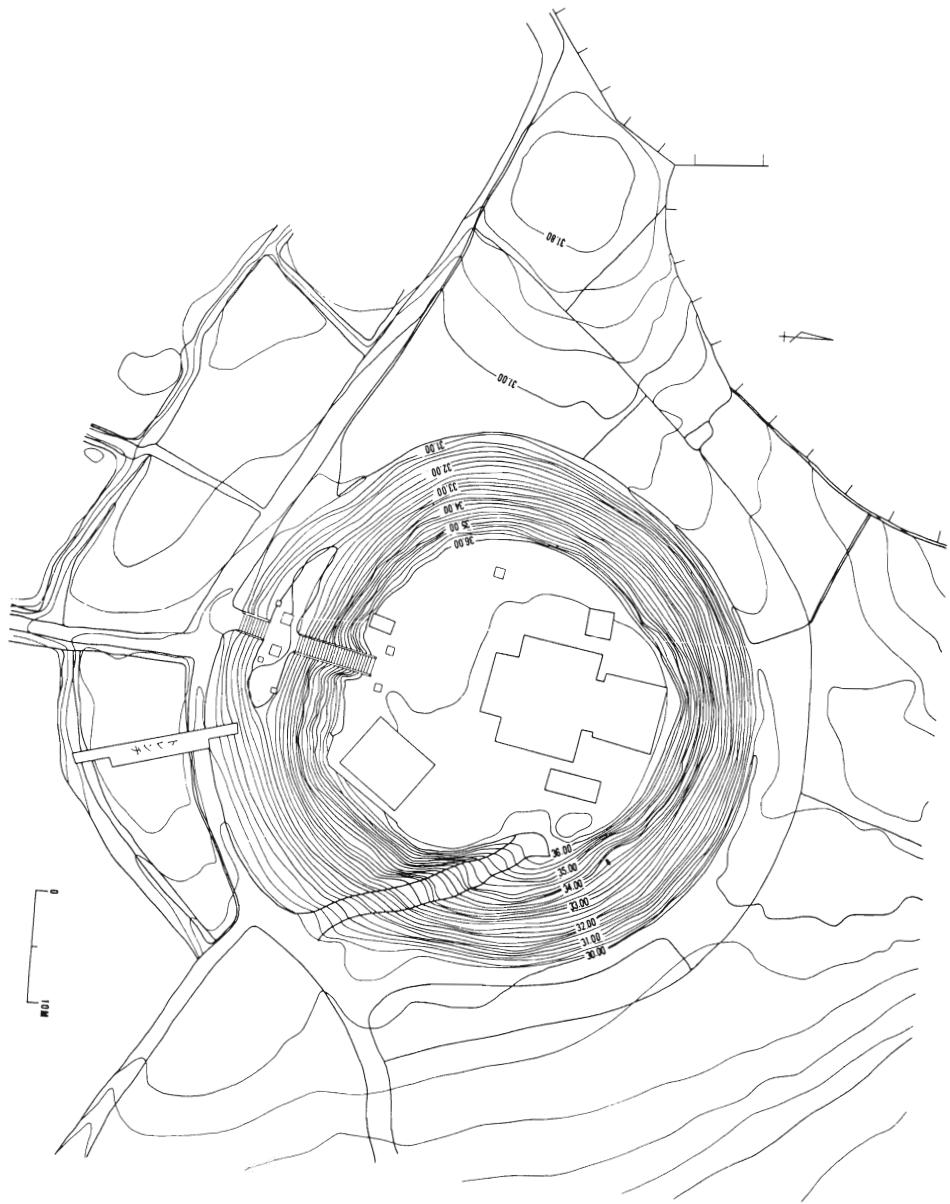
径17m、高さ2mを呈す。内部主体は2基確認されている。第1主体部は墓壙最大長9.7m、幅3.26mで、木棺は割竹形を呈し最大長7.8m、幅0.5～0.7mで、主軸は東西である。副葬品は、ガラス・琥珀製小玉9、棗玉1、琥珀製勾玉1、瑪瑙製管玉1、鉄鎌片が確認されている。また、供献土器も出土している。第2主体部は、長さ4.45m、幅0.6～0.9mの割竹形を呈している。副葬品は発見されていない。



第1図 御所ヶ谷円形周溝墓（大川他 1988より）



第2図 御所塚古墳 (大川他 1988より)

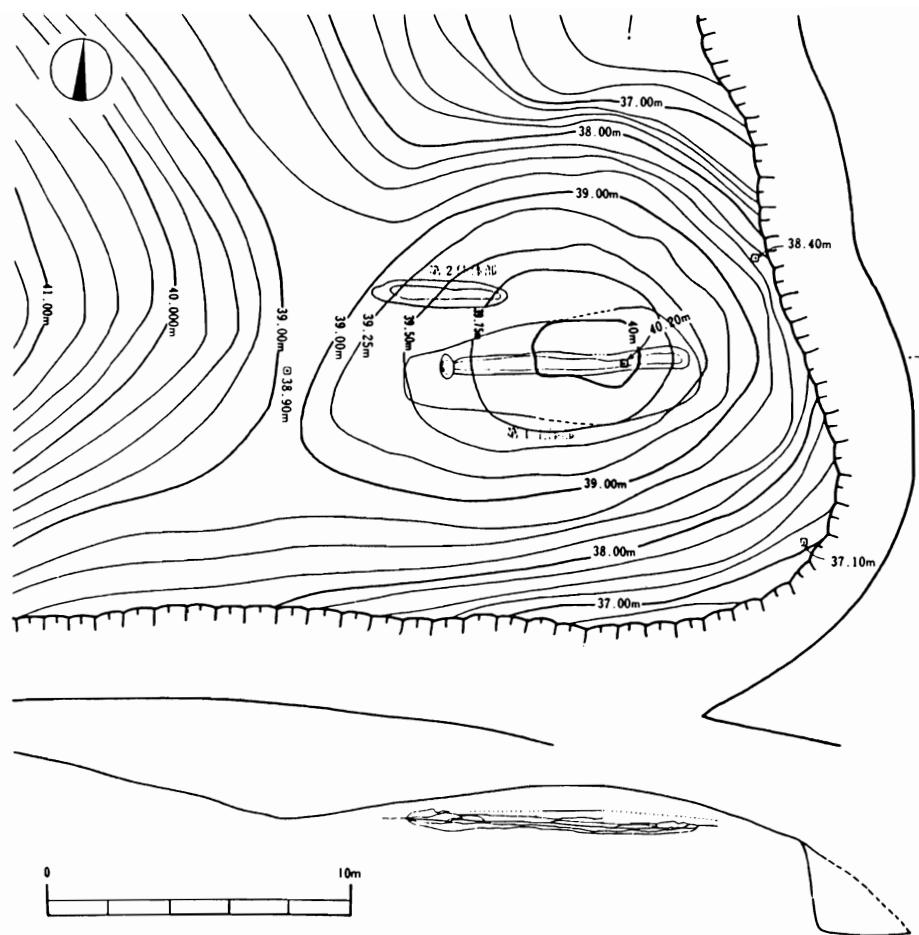


第3図 小金塚古墳（久保編 1985より）

2. 方丘墓（田中新史分類B亜式～B式・赤塚二部分類B型）

ア. 横浜市東耕地遺跡（山本・大上 1986）

1号方形周溝墓は主軸を南北にとり、規模は一辺9mである。周溝内からは、壺・鉢・元屋敷系高坏・台付甕等が出土している。また、壺棺を伴う。



第4図 久地伊屋之免古墳（持田・村田 1987より）

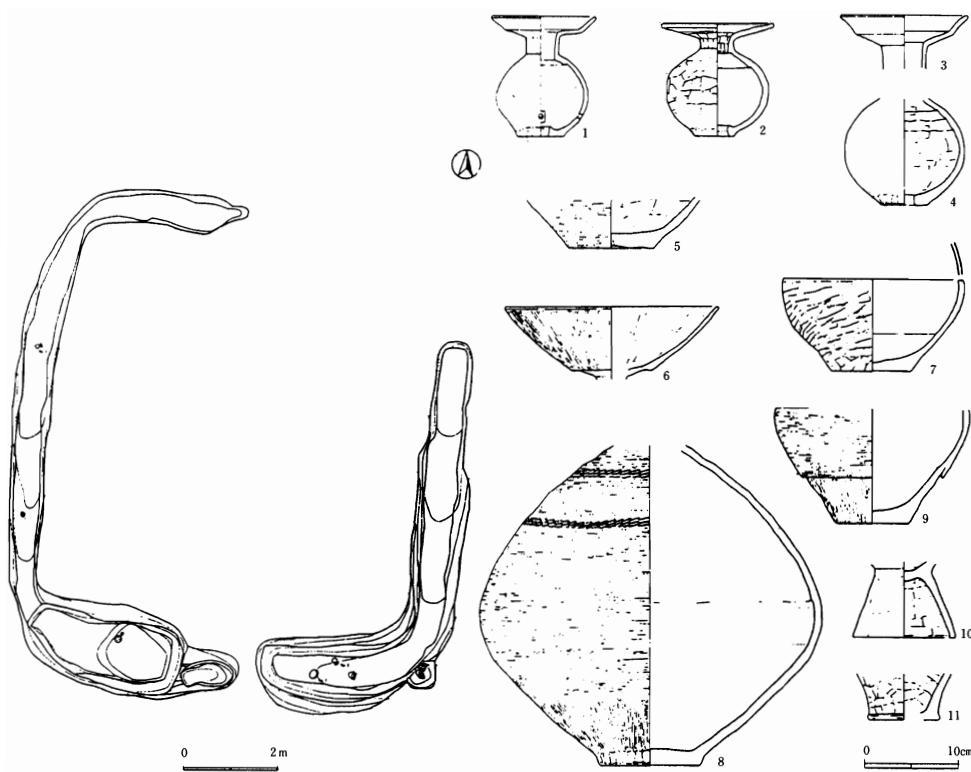
イ. 三浦市松輪大畠遺跡（市川 1981）

1号墓は全面調査されてはいないが、確認調査から辺の中央部に通路を設けているものと判断されている。規模は東西13.2m、南北12.2mである。北側の周溝から球形の胴部、折り返し口縁、ヘラ磨きの施された壺型土器が出土している。

3. 前方後方型墳墓

ア. 平塚市豊田本郷遺跡（明石 1985）

SKD01は東部分が未調査だが、辺の中央の通路が外開きの前方部形態をとり、主軸を北東に向かう、規模は南北長17.6mを呈す。周溝底から器台型土器が出土している。



第5図 東耕地1号方形周溝墓（山本・大上 1986より）

イ. 横浜市緑区稻ヶ原遺跡（平子・橋本 1992）

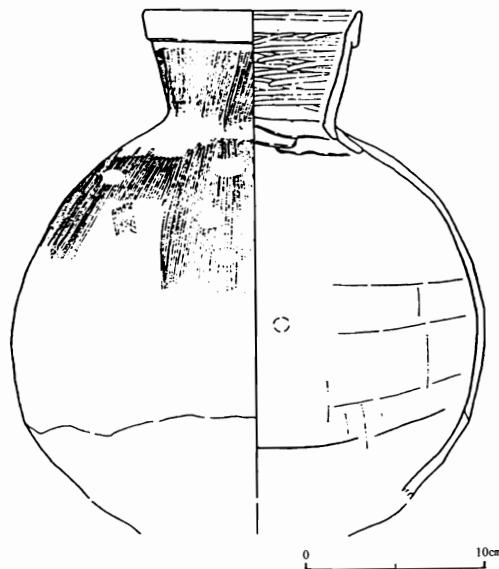
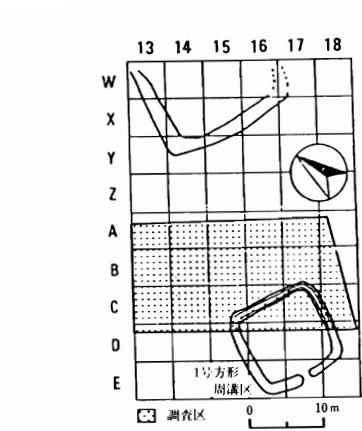
A地点1号方形周溝墓は主軸を南西に向け、規模は17m×16mである。周溝内中層～上層から壺・器台・台付甕等が出土している。主体部は削平されて確認されていない。長胴化した台付甕、ヘラ磨きの壺等が出土している。

4. 古 墳（群）

ア. 海老名市秋葉山古墳群（北川 1991, 服部 1993, 海老名市教委 1994）

秋葉山古墳群は、前方後円墳の秋葉山1号墳（墳長58m）、帆立貝型古墳の2号墳（墳長48m）、前方後円墳の3号墳（推定墳長51m）、前方後方墳の4号墳（墳長41m）、方墳の5号墳（東南辺17m）、円墳の6号墳（（規模不明、服部 1993）の構成である。

- 1号墳の前方部端がトレーニング調査されており、周溝といわゆる五領スコリア層が確認されている。
- 3号墳の調査では、壺型土器（無文のもの、羽状縞文をもつもの）と甕型土器（刷



第6図 松輪大畠1号方形周溝墓（市川 1981より）

いる。出土遺物は、表土中より埴型土器が、周溝内よりハケ目調整の壺型土器2、小型壺型土器、ヘラ磨きの高坏脚部、平底坏である。また、盜掘墳から剣が出土している。

- 2号墳は墳形、供獻土器、埋葬主体部と副葬品が判明している数少ない前方後方墳である。主体部は後方部中央に確認され、 $8.7m \times 3.5m$ の墓壙に $6.7m \times 0.85m$ の割竹形木棺と考えられる痕跡がみられた。副葬品は、ヤリ型鉄器（原報告では剣）2、刀子1、滑石製勾玉1、滑石製棗玉1、碧玉製管玉11（両面穿孔8・片面穿孔3）、滑石製臼玉15、ガラス小玉5である。また、くびれ部より小型丸底壙が出土している。

エ. 平塚市真土大塚山古墳（石野 1936・日野 1961・本村 1974）

毛目をもつもの）が出土した。

- 4号墳の後方部西側のトレーンチから壺形土器が出土している。
- 5号墳からは埴型土器、高坏が出土している。
土器の先後関係から3号墳-5号墳-4号墳の順に築造された可能性がある。

イ. 横浜市稻荷前古墳群（甘粕 1969・山口 1983）

稻荷前古墳群は、前方後円墳の1号墳(46m)、6号墳(32m)、前方後方墳の16号墳(37.5m)、円墳の2・3・5・13号墳、方墳の14・15・17号墳の計10基の古墳群である。

16号墳は、墳形の確認調査が行われただけで主体部は未調査である。

周溝内から小型器台1、壺型土器6が出土している。

ウ. 横浜市東野台古墳群（石川 1992）

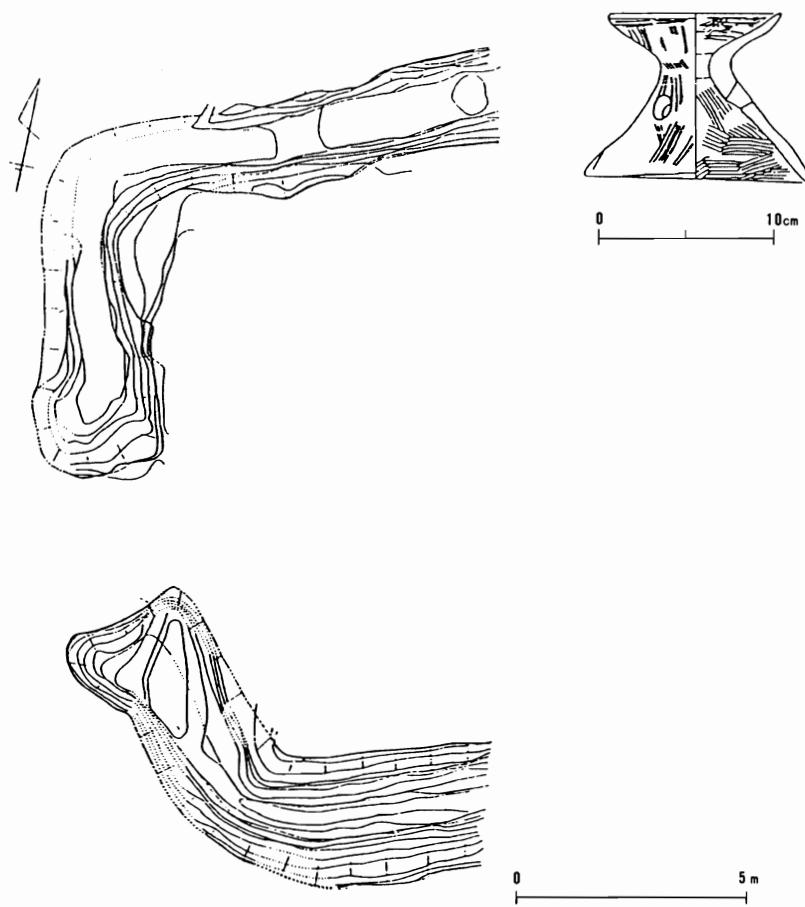
東野台古墳群は、方墳の1号墳（東西辺13.5）、前方後方墳の2号墳(54)からなる古墳群である。

- 1号墳は周溝の北側及び西と東側が遺存し、周溝の北側に通路を設けて

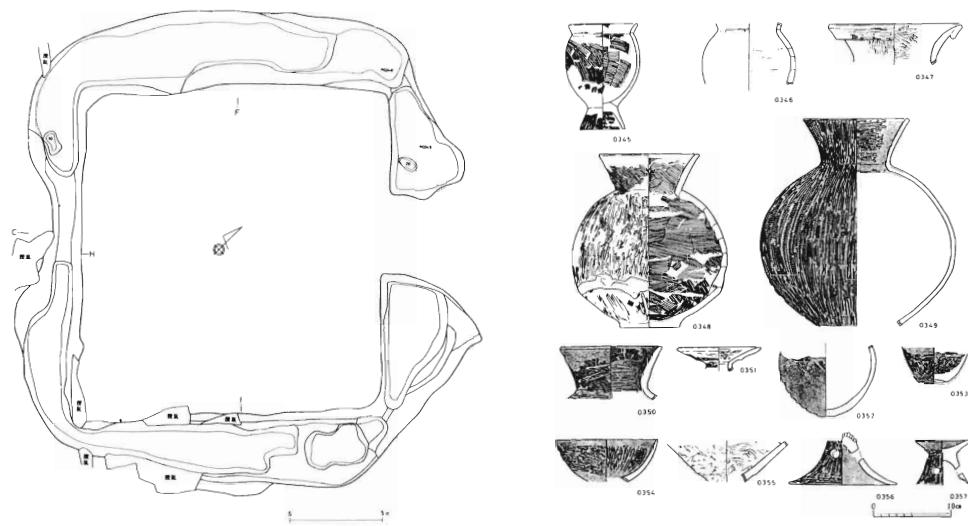
古い調査のため墳形は不明だが、本村豪章は墳形を前方後方墳と想定している。この当否はともかく重要なのは、埋葬主体部を2基推定し、下部にあった推定長6.2m×1.3mの直葬主体部から三角縁四神二獸鏡・直刀・短冊型鉄斧・有袋鉄斧・柳葉式銅鏡・碧玉製管玉・刀子・巴型銅器5が出土し、上部の推定長1.1m×1mの舟底型朱線がのこる粘土櫛からは仿製四獸鏡・定角式銅鏡・水晶製勾玉・水晶製算盤玉が出土し、残ったガラス小玉等は不明、銅鏡は両櫛から出土しているということであろう。

オ. 厚木市・伊勢原市愛甲大塚古墳

厚木市と伊勢原市にまたがる愛甲大塚古墳（墳長70m以上）は、1990年から93年にかけて断続的に調査が行われ、墳丘は削平されていたが段を有する前方部の周溝が約半分確認された。伊勢原市教育委員会のご好意で未整理だが周溝内から出土した土器を実見したところ、壺型土器で布留式期古段階のものであろう。



第7図 豊田本郷SKD01（明石 1985より）

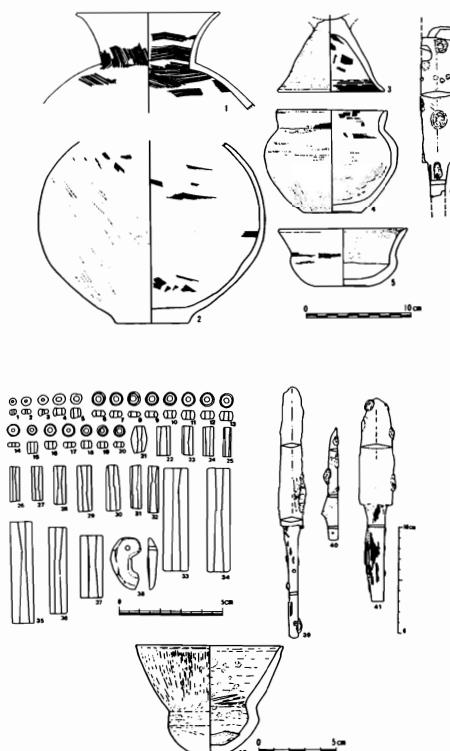


第8図 稲ヶ原A地点1号方形周溝墓（平子・橋本 1992より）



第9図 秋葉山古墳群位置図と出土土器（服部 1993より）

畿内第五様式から布留式期の神奈川県をまとめると、畿内第五様式・山中式併行期は弥生町式・朝光寺原式など地域色の強い土器群と、すでに規模差をもった方形周溝墓が墓制として存在する段階。この時期にすでに集落内では完熟度の高い共同体社会が形成されて



第10図 東野台1号墳出土物(上)・2号墳(下)

いる」とみることができる。

次の段階の相模II・纏向2~3・庄内併行期が重要である。特徴的なことは土器の移動である。特に東海地方西部との関連が強く、その背後に人の移動、つまり小型器台・小型高壇など供献土器の使用から墓制の変化を意味した移動が考えられる。また、この時期に相模平野では、御所ヶ谷遺跡を例とする円丘墓の出現をみると。この思想は、隣接する御所塚古墳に通じるとみることができ、さらには、真土大塚山古墳の出現をみるとことになる。ここに、拠点として円丘墓の築造思想の流入がある。また、副葬品をもつ被葬者が現れるのもこの時期である。平塚市王子ノ台5号方形周溝墓の主体部からは鉄剣が、7号方形周溝墓からはガラス小玉が出土している。

相模III・布留古~中・廻間III~IV段階、この時期は当地域にも方形周溝墓の辺の中央部



第11図 愛甲大塚古墳 (『東海史学』 24号より)

がとぎれたBⅠ亜式や、周溝のとぎれた部分が外開きの形態をとるB型前方後方型周溝墓が出現する。それらは松輪大畠1号墓（BⅠ亜型）・稻ヶ原遺跡1号墓・豊田本郷遺跡1号墓（BⅡ型）などでみられるが、単位墓域の中での前方後方形周溝墓への継続は確認できていない。しかし将来的にはBⅢ型が発見される可能性は否定できない。また、前代に引き続き、副葬品をもつ被葬者が存在する。平塚市万田熊ノ台遺跡の方形周溝墓は周溝内から人骨が出土し、頭部から小型素文鏡が、頸部から碧玉製管玉・鉄鏃が発見され、平塚市原口遺跡1号方形周溝墓の主体部からは、銅釧・ガラス玉・石製臼玉が出土している（長谷川他 1994）。

また、当期は列島内各地で前方後円墳の出現をみる。相模でも前方後円墳の出現をみる。愛甲大塚古墳は出土した壺型土器、バチ型の前方部、表採ではあるが、古式の鉄鏃から勘案すると、関東地方でも最も早く成立した前方後円墳であると推察できる。稻荷前16号墳は鶴見川流域で最も早く成立した古墳で、同じ墓域内で、前方後円墳と前方後方墳と方墳と重層的な構造がみられる。

布留式期中段階には、多摩川流域にも前方後円墳が築造される。多摩川流域では、前方後円墳は下流域に集中し、右岸の横浜市観音松古墳・川崎市加瀬白山古墳が対峙しつつ単独で築造される。この二者の前後関係は、まず白山古墳が築造され、次に観音松古墳が築造される。

相模川流域では、愛甲大塚古墳の出現後、円丘墓の系譜の中で真土大塚山古墳が築造される。真土大塚山古墳は古相の副葬品の組み合わせから3期とする。また、秋葉山古墳群は鶴見川流域の稻荷前古墳群のように重層的な構造だが、古墳群の出現は明らかではない。今後の調査に期待したい。小金塚古墳には古式の埴輪が採用される。これが円墳であることは異様な感がある。

古い様相を呈する前方後円墳としては、厚木市地頭山古墳⁽⁷⁾（72m）、海老名市瓢箪塚古墳（65m）があるが、ともに未調査である。

4. 神奈川県における古墳時代の開始

古墳時代の開始をたどる場合3つの考えがあることは初章で確認したが、古墳時代という名称は墓制の特質に基づいて区分されているので、墓がその時代の政治や階級を反映していることからも、古墳時代を区分するにはその観点で設定することにしたい。すなわち、土器の様相から弥生時代と古墳時代を区分するという土器研究者の立場は墓制を基本的に設定する時代という考えには反する。しかし、布留甕の成立は前方後円墳の出現と軌を一にする考え方も捨て切れてはいない。また、「墳丘墓」を古墳に含めて論じようすると、「古墳」がさらに遡り、弥生時代の後半は古墳時代に含まれてしまう。弥生時代はそれ自

体重要な時代区分である。弥生時代はその時代価値を認め、古墳時代はその歴史的画期を近藤義郎や都出比呂史などの考えに沿い、定型的な古墳の出現をもって始まりとしたい。前方後円墳は定型的であるが、関東地方において竪穴式石室を欠く前方後円墳は普遍的であるし、三角縁神獣鏡は数面しか出土していないのも事実である。割竹形木棺の採用も遅れる。よって近藤のいう3点の特徴は満たされないものが多くを占める。そこで同時代性をもって配慮し、最古の古墳である奈良県箸墓古墳以降築造された墳墓を「古墳」と呼びたい。ただ、箸墓古墳は未発掘墳であるが、その出土土器（布留0式）⁽¹⁰⁾は基準資料となりうる。

神奈川県において弥生時代後期に副葬品や着装品をもつ被葬者が出現することは、神奈川県に限らず汎日本的な類似性ともいえる。着装品の品目は剣・玉・鏡であり、他地域では鉄鎌や銅鎌も加わる。しかし、これらすべてをもった墳墓は未発見である。これが前方後円墳になると、副葬品には三角縁神獣鏡や短甲・短冊型鉄斧などの武器や工具が加わる。これは各地の集団墓や特定首長墓に単独ないしは分散して副葬されていた品目が、巨大な権力をもった大首長のもとに集約される現象（北條 1990）とみてもよかろう。それが古墳時代の幕開けといえる。当地域では平塚市真土大塚山古墳・川崎市加瀬白山古墳の出現をもって明らかに「前方後円墳体制」に組み込まれ、時期的には『前方後円墳集成』編年3期（新潟シンポ編年9期）に対応する。愛甲大塚古墳は、布留式期古段階の土器を出土し、前方部はバチ型を呈す古式の前方後円墳である可能性がある。そうみると、真土大塚山古墳より出現は早く、時期的には『前方後円墳集成』編年1期を上限とする時期を与えることができる。

前方後方墳の出現は、相模川流域では秋葉山古墳群4号墳がおそらく前方後円墳に遅れて築造されるが、鶴見川流域では前方後円墳（稻荷前1号・6号墳）に先行して築造される。多摩川流域では対岸の東京都に砧7号墳が存在するが、前方後円墳に遅れて出現する。横浜市東野台古墳群の築造も遅れて、方丘墓の系列のなかで重層的構造である。

「前方後円墳体制」という階層的システムに組み込まれた在地首長たちは、弥生時代からの方丘墳墓を築きながらも自らも前方部を作りだし、墳丘を大型化していく。そして前方後方墳を築造するようになる。それが前方後円墳を築いた首長に組み込まれた例は秋葉山古墳群・稻荷前古墳群であろう。また、階層的システムに組み込まれなかった首長層は、方形周溝墓の造営を続ける。これは後まで続く。円丘をもつ小古墳は、前方後方墳や前方後円墳に遅れ、割竹形木棺を持つが、山の上2号墳のような方墳にも採用される。

地頭山古墳や瓢箪塚古墳など前方後円墳や、真土大塚山古墳のように畿内前期古墳に類する副葬品をもつ古墳や、小金塚古墳のように埴輪祭祀をもつ古墳はおおむね単独で存在することが多い。これらは在地の系譜を持たず畿内からの派遣将軍とまでは言えないにしても、新しく入植した新興首長の拠点として考えることができる。

集落内では、大規模な墓域と環壕をもつ海老名市本郷遺跡を例に挙げると、廻間Ⅲ式期後半併行期に方形周溝墓の造墓活動が終焉するだけなく、玉造工房が形成されるという。ここでも階層的システムに組み込まれた事実が検証できる。伊勢原市坪ノ内久門寺遺跡も玉造工房が検出され、本郷遺跡と共に北陸系の甕を出土していることからも分かる。北陸地方からの工人の導入があったのであろう。

おわりに

本稿では、古墳時代の概念を明らかにすること、その上に立って神奈川県内の古墳時代の開始をどこに置くかを考えた。そこにはいくつかの問題点がある。

まず、方形周溝墓の存在である。弥生時代と古墳時代のそれは形態において何ら変わりないものが存在し、名称も、「古墳時代の方形周溝墓」「方丘墓」「方墳」と様々である。古墳時代の方形周溝墓という呼び方を認めるか否かという問題がある。また、私は土器の様式で時代区分の線引きするのはよくないという立場にたつ。

次に遅くまで方形周溝墓が残る場合である。都出によると、「方墳」の被葬者は前方後円墳の被葬者を頂点とする身分的編成の4番目におかれている（都出 1989）が、筆者は、方形周溝墓の被葬者はこのシステムに組み込まれ得なかったと考えた。もし組み込まれていたとするなら、本郷遺跡のように巨大な首長に吸収され、方形周溝墓の造営は許されなかつたであろう。方形周溝墓から古墳へ転換する地域は多くある。

それから、前方後方墳の被葬者の評価である。まず、前方後方墳は前方後方型周溝墓の前方部を拡張したものであり、被葬者は地域首長と理解しているが、赤塚によると、前方後方墳の分布と拡散における東海系土器の動きとは呼応しているという（赤塚 1992）。また、比田井（1993）は濃尾平野からの土器の影響と前方後方墳の成立をセットでとらえ、次に畿内地方からの強い影響と前方後円墳の築造というプロセスを指摘している。派遣將軍説をも含めて東国社会の政治秩序の再検討を要する。

以上、神奈川県の墳墓を取り上げ、古墳時代の開始を設定したが、新しい知見を述べることができなかった。また、筆者の不勉強から間違いも多いと思う。諸学兄のご批判を仰ぎたい。

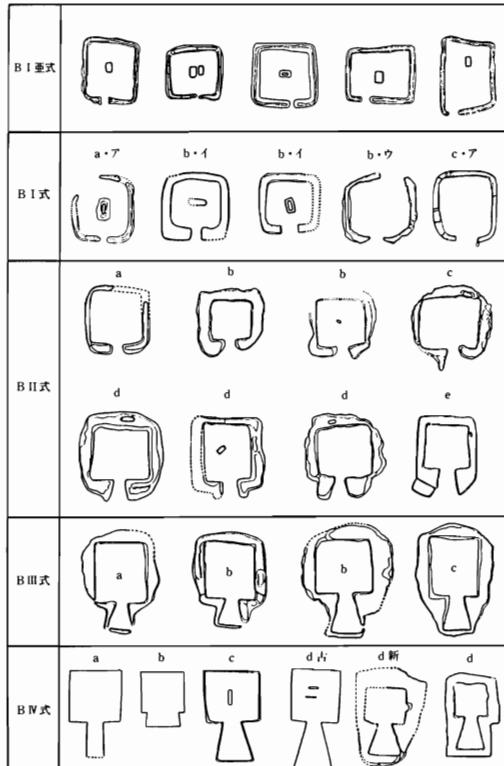
なお、本稿は川崎市教育文化研究所双書『古墳時代の神奈川』に書き下ろしたものをお加筆・訂正したものである。

末筆ではあるが、本稿を起こすにあたり、次の方々のご教示、ご協力を得た。銘記して感謝したい。

明石新、及川良彦、北川吉明、車崎正彦、合田芳正、後藤喜八郎、立花実、服部みはる、村田文夫。

註

- (1) 石野は日本考古学協会の新潟大会において、岡山南部では三段築成をもつ前方後円墳や割竹形木棺をもつ前方後円墳は3割に満たないことを指摘するとともに東国では長野県更埴市森將軍塚の例をも挙げ、墳丘を改変させてもあの場所（やせ尾根）こだわったのはなぜかと問題を提起する発言をした。
- (2) 杉山はシンポジウム「東国古墳の出現と終末」のなかで考え方を詳しく述べている。
大塚初重編1992『東国の古墳』季刊考古学・別冊3 雄山閣
- (3) 田中新史の分類は第12図の通りである。
- (4) いちがいに右岸・左岸と土器様相の違いは指摘できることは、西川が述べている。例えば右岸の厚木市子ノ神遺跡では櫛描文の壺が縄文の壺とほぼ同比率を示すという。出土土器の様相は遺跡ごとに違うとも言える。今後の課題である。西川修一1991「相模後期弥生社会の研究」『古代探叢』Ⅲ早稲田大学出版部
- (5) 海老名市教育委員会の服部みはる氏のご教示による。
- (6) 伊勢原市教育委員会の立花実氏のご好意による。
- (7) 地頭山古墳は前方部がバチ型を呈すという指摘があるが、確かに西側はそのように見えるかもしれないが、墓地のために道路が敷設されており、墳丘が改変されている。発掘調査によって確認されなければならない。
- (8) 森岡秀人は、布留式甕の成立は不明な点が多いとしながらも吉備からの技法的や山陰系統土器の影響を指摘している。森岡秀人「4土師器の移動1西日本」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器 雄山閣 1991
前方後円墳の諸要素も吉備や山陰からの影響が大きいことは周知の事実である。
- (9) 定型的としたのは「前方後円墳成立時には」という意味である。
- (10) 寺沢薰は、布留0式期を提唱し、その構成は布留型甕の出現と小型精鍊土器3種の完備だという。そして奈良県箸墓古墳出土の二重口縁壺を布留0式期に位置づけている。『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49冊 1986
1995年2月19日に箸墓古墳の北側にある大池の護岸工事に先立って行われた古墳の裾部分の発掘調査現地説明会に参加する機会を得た。出土土器は布留0式で、箸墓古墳出土の茶臼山型二重口縁壺は布留0式であると仮説された寺沢の考えは立証されたことになる。
- (11) 合田芳正氏のご教示による。



第12図 前方後方型周溝墓の分類 田中 1986より

引用・参考文献

- 明石 新 1985 『豊田本郷』 豊田本郷遺跡発掘調査団
- 赤塚 次郎 1991 「東海系のトレース」『古代文化』44-6
- 甘粕 健 1969 「稻荷前古墳群をめぐる諸問題」『考古学研究』16-2
- 石川 和明 1992 「東野台古墳群調査報告」『調査研究集録』第9冊横浜市ふるさと歴史財団
- 石野 瑛 1936 「砂丘を利用したる古墳例—相模国中郡大野村真土大塚山古墳」『考古学雑誌』26-4
- 石野 博信 1981 「古墳出現期の具体相」『関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢』関西大学
- 石野 博信 1992 「古墳の形が意味するもの」季刊『考古学』40号
- 市川 正史 1981 『松輪大畠遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告22
- 梅沢 重昭・橋本博文 1988 「群馬県」『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』日本考古学協会
- 海老名市教育委員会編 1994 『知られざる海老名の古墳』第19回 海老名市温故館特別展パンフレット
- 大川 清編 1988 『御所ヶ谷遺跡』日本窯業史研究所
- 大塚初重編 1992 『東国の古墳』季刊考古学・別冊3 雄山閣
- 大村 直 1982 「東国における前期古墳の再評価」『物質文化』39号
- 岡本 勇他 1978 『神奈川県史』通史編1
- 北川 吉明 1991 『秋葉山古墳群』秋葉山古墳調査会縄文文化研究会
- 川西 宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- 久保哲三編 1988 『シンポジウム関東における古墳出現期の諸問題』日本考古学協会
- 久保哲三編 1985 『小金塚古墳』伊勢原市教育委員会
- 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 1986 『古代の横浜』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 近藤 義郎 1983 『前方後円墳の時代』岩波書店
- 近藤義郎編 1990 『前方後円墳集成』山川出版社
- 関根 孝夫 1992 「総括 西相模の方形周溝墓と前期古墳—とくに相模川右岸地域を中心として—」『東海大学校地内遺跡調査団報告』3 東海大学校地内遺跡調査会
- 田中 新史 1984 「出現期古墳の理解と展望—東国神門5号墳の調査と関連して—」
「古代」77号 早稲田大学考古学会
- 田中 新史 1986 「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46大和書房
- 都出比呂史 1989 「古墳の誕生と終焉」『古代史復元6』講談社
- 東海大学文学部東海大学校地内遺跡調査団 1991 「西相模の弥生時代から古墳前期の土器様相」
『西相模の3・4世紀』
- 利根川章彦 1991 「いわゆる「古墳出現期」の認識の方法について」『埼玉考古学論集』
- 西川 修一 1993 「1相模・多摩丘陵における弥生後期後半～古墳前期の土器と集落の様相」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 長谷川厚他 1994 「平塚市原口遺跡」第18回『神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨
- 服部みはる 1993 「秋葉山（あきばやま）古墳群」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程

- の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 比田井克仁 1993 「東国における外来土器の展開」『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集
- 日野 一郎 1961 「真土・大塚山古墳」『平塚市埋蔵文化財調査報告書』第3集
- 平子 順一・橋本 昌幸 1992 『稻ヶ原遺跡A地点 調査報告書』(財)横浜市ふるさと歴史財団
- 北條 芳隆 1990 「古墳成立期における地域間の相互作用」－北部九州の評価をめぐって－『考古学研究』146号
- 右島 和夫 1990 「3群馬」『古墳時代の研究』11 地域の古墳 雄山閣
- 持田 春吉・村田 文夫 1987 『川崎市高津区久地伊屋之免遺跡』高津図書館友の会郷土史研究部
- 本村 豪章 1974 「相模・真土大塚山古墳の再検討」『考古学雑誌』60-1
- 山口 隆夫 1983 「稻荷前16号墳」『古代の都築を学ぶ』緑区郷土史研究会考古部会
- 山本 晖久・大上 周三 1986 『東耕地遺跡』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告14